



がん教育講演会

21日(月)の5時間目に順天堂大学医学部 病理・腫瘍学教授の樋野興夫先生をお招きして、がん教育講演会が行われました。「がん」と言えば日本人の2人に1人が患い、3人に1人が亡くなる身近であり大変恐ろしい病です。しかし、中学生ががんを発症する確率は極めて低く、中学生の今、がんについて考える機会はそう多くはないのではないかと思います。それだけに、今回の講演会は生徒にとって「がん」のを知る貴重な講演会となりました。

講演会の内容としては、がんを発症する人が年間100万人いることや、細胞は普通その場にとどまるけれど、がん細胞は他の細胞に転移すること、がんになっても約62%の人は5年後も生存していることなど、がんに関する話が冒頭でありました。中盤からは、がんという病気を通して、人生をどう生きていき、向き合っていくかということに焦点を当てて話が進みました。



以下は生徒の感想です。

- ・辛そうにしている人を笑顔にできる人になりたいと思った。 石田くん
- ・がんのことはもちろん、人生のためになることを教えてもらったので、とてもよかった。 平山くん
- ・がんにはいいには、コミュニケーションや気持ちなのだ分かった。もし自分ががんにかかったら、マイナス思考を捨てて、前を見て、ポジティブに生きていこうと思った。 古林くん
- ・人とどのように関わっていくべきなのか、病気の人への対応の仕方など、考えさせられた。石川さん
- ・私はがんについて、全く考えたことがありませんでした。がんはかかると治らない、死んでしまうと聞いていましたが、今では治る病気であることを知りました。最新医療技術はすごい。 渡邊さん
- ・誰しもがんにかかる可能性があることは悲しいですが、最近がんは治せるようになったと言っていたので、嬉しかったです。 山本さん
- ・「がん教育講演会」ということで、がんの予防の話を書くかと思ったら、がんを通しての人生とか、人は生きていくことに意味があるという内容の話で、ためになりました。 大澤さん

先生も数年前までは「がん」という病については、患う人が多く、日本人の死因第一位くらいしか知識がありませんでした。しかし、身近な人ががんと壮絶な闘いをし、苦しんだ末に亡くなったことをきっかけに、がんの恐ろしさや予防法を調べたり、実践をしたりするようになりました。

今回の講演会で命の大切さ、尊さ、がんを患ってしまった人への配慮を知るよい機会となったと思います。大人になってもぜひ覚えておいて、今回学んだことを生かすべき時に生かしていきましょう。



3E 21日のステキ

昨日の給食の時間、澤田くんが腹痛を訴え、給食終了直前に席を外しました。すると、給食の終わりを告げるチャイムが鳴りました。みんなは自分の食器を片付けに続々と配膳台へと向かいます。澤田くんはまだ教室に戻らず、このまま時間が流れれば澤田くんの机の上には食べかけたご飯やおかずがそのままの状態でも当番が食缶などを配膳室へ戻す状況になっていました。「このままでは澤田くんが戻ってきたら困ってしまう！」恐らくそう思ったことでしょう。近くの席の冨成くんと渡邊さんが率先して澤田くんの食べかけたご飯とお皿を戻しに来てくれたのです。このままでは、きっとこの人は困る状況になるだろうと予測がつく場面に遭遇することはあります。そんな時に行動することができた二人はとてもステキです。

